

心を尽くす須磨の秋風

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしの やすこ

一 畿内の西の果て

JR須磨駅は、改札を出て高架になっている駅舎から階段を下りるとすぐに砂浜、という海岸線ざりざりの立地である。このあたりは六甲山系の末端が海に迫っているため、海ぎわの狭い平地をJR、国道、山陽電鉄が争うように走っている。重機のなかった昔は道幅を広げようもなく、なおさら、狭く通りにくい道であったことだろう。海路をとるにしても、淡路島の島影も間近な明石海峡は、潮の流れが速い難所である。この須磨を通り抜けると西は播磨国、すでに畿内ではなく、都の人々からみれば「人の国」(地方、田舎)となるのだった。関所が置かれ、在原行平、光源氏が隠遁し、また、一ノ谷で源平が攻防したのも、須磨が畿内の西端で、交通上の難所ということを知ればなるほどとうなずける。

二 貴公子たちの須磨

須磨は古代から和歌に詠まれ、都から離れた寂しげな土地という文学的イメージを積み重ねてきた。
須磨の海人の塩焼き衣のなれなばか
一日も君を忘れて思はむ
(万葉集 巻六 山部赤人)
須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ
思はぬ方にたなびきにけり
(古今集 恋四 よみ人しらす)
淡路島かよふ千鳥のなく声に
いく夜寝覚めぬ須磨の関守
(金葉集 冬 源兼昌 のちに百人一首)
海人が塩を焼き、その煙がくゆり、千鳥の鳴く声ばかりが聞こえる、そんな寂しい海辺が和歌における須磨の景色であった。

そうした中で、須磨のイメージを決定

須磨に吹く「心づくしの秋風」の「心づくし」とは、悲しみに心を尽き果てさせることをいう。また、この「秋風」はすこし離れた海辺から浦波の音を運んでくる風でもある。「関吹き越ゆる須磨の浦波」(続古今集)と行平が詠んだ、その波音を耳にした光源氏は「げに(本当に)」とさらに悲しみを深くする。

行平や光源氏は須磨という畿内の果ての地で、遠く離れた都への思いに身を任せている。彼らの流離の悲しみの情に我々は心を動かされる。しかし、ここから感じられるのは、ただ悲しい、ということだけではないだろう。流謫の貴公子が悲しみに懊悩するさまには、美しく甘やかな詩情がある。

さらに、源平のころ、平敦盛が熊谷直実に討たれた一ノ谷も須磨である。わずかに十七歳、「容顔まことに美麗なりければ」と描かれた敦盛の最期は、平家物語中でもとりわけ愛惜の情をもよおすエピソードであろう。

こうした美しく悲しい貴公子を描いた和歌や物語は人々に深い印象を残した。

これらの作品はのちの時代にも繰り返し取り上げられ、源氏物語を素材にした和歌や、謡曲「敦盛」、さらには、芭蕉の発句を生み出してゆく。

三 現代の須磨と古典

このように、須磨は古代からの文学の記憶が積み重なっている場所である。さらに、そうした文学に対する人々の思いが新たな現実を作り出している場所でもある。

古今集行平歌とそれにもつわる伝承を素材とした謡曲「松風」は、行平の須磨での恋人であった松風・村雨姉妹をシテとする。姉妹の庵の跡とされる松風村雨堂は江戸時代の名所図会にも既に見えているが、もちろん、松風・村雨姉妹が実在したとは考えられず、創作が現実の文学遺跡を作り出したことになる。また須磨区内の町名には、謡曲「松風」にちなんだ行平町、松風町、村雨町や、源氏物語須磨巻の「植ゑし若木の桜、ほのかに

づけたのは、古今集の在原行平(在原業平の兄)の次の和歌(雑下)である。
わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に
藻塩たれつわぶとこたへよ

この歌の詞書には「田村の御時に事にあたりて」とあり、行平が文徳天皇の時代に何らかの事件に連座して須磨に隠棲したことが知られる。行平は「とふ人あらば、『わぶ』とこたへよ(私のことを問う人がいたら、『つらい思いで暮らしている』と答えてください)」と、遠く宮中にいる知人に向けて悲しみを吐露している。流謫の貴人が「わぶ」、つまり、心をくずおれさせているさまは、そのまま、源氏物語須磨巻の光源氏の姿に投影された。

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。
(三年「古典の伝統」教科書P158より)

咲きそめて」にちなむとおもわれる若木町、桜木町などがある。つまり、須磨では、古典文学に対する人々の誇りや憧憬が新たな現実を生み出してきたのである。現在の須磨は、とくに夏ともなれば、海浜公園や水族園に遊ぶ家族連れや水着の若者でにぎわう、古典文学を知らぬ人にとっては、典型的な海辺の町に見えるだろう。しかし、ここは千年以上の文学的イメージが積み重なった町であり、そのような思いをもって、この町にかつての姿を重ね合わせてみると、海の家や喧噪も台風も通り過ぎたあとの、須磨の秋の海辺の寂しさに、現実に見ええるもの以上の感興を催すことができる。それは、古典の知識が見せる幻のようなものかもしれない。しかし、須磨の秋風に現代の我々が心を尽くすとき、また新たな詩情が生まれてくるはずである。

「古典への扉」は今号で最終回となります。
ご愛読ありがとうございました。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に『奥義抄』から『僻案抄』へ「そが菊」注にみる院政期歌学の一様相」(『国語国文』)など。共著書に「八雲御抄の研究 正義部作法部(片桐洋一編)和泉書院」「宴曲索引」(伊藤正義監修、和泉書院)などがある。